

---

# 受付嬢コンフィデンシャル

巡シンイチ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

受付嬢コンフィデンシャル

### 【Nコード】

N4893I

### 【作者名】

巡シンイチ

### 【あらすじ】

大手電気メーカーの受付嬢、不思議ちゃんこと桜井真奈美（28才バツイチ子持ち）とキャリアウーマンになり切れない女、風間幸子（29才新婚ホヤホヤ）の噛み合わない毎日。受付という職場の日常とその隙間に潜む女同士の本音と建前に密着。

## #1 (前書き)

誰もが知りたい？受付嬢の内幕もの。女同士のややこしい職場を想像力を駆使して描いてみました。新社会人を目指すアナタ必見！男性諸氏にサービスのため一部ハレンチな描写がありますので苦手な方はご遠慮ください。只今のんびりモードで連載中。

吹き抜けのエントランスは全面ガラス張りだった。格子状に巡らされたガラス枠や支柱はすべてピカピカのクロムメッキ仕上げで、エントランスを歩くとあちこちに自身の姿が映し出される。だから初めてここを訪れた人達は決まってクロムメッキに映った自分の影に驚き戸惑っては周囲を落ち着きなく見回す羽目になる。

3フロア分の高さを誇る吹き抜けのてっぺんにはドーム型の大きな天窗が乗っかっていて、真奈美はいつもこの正面玄関一帯が巨大な虫カゴのように思えた。

虫カゴにはカマキリやらトンボやらカブトムシやらがうようよいで、本社の奥に繋がる通路からカナブンやバツタが引つ切りなしに出入りするのを眺めるのが日課だった。

真奈美は昔から虫が大の苦手だが、翔太が近所の公園から採集して来るのをやめるとは言えない。一人息子から自慢げに虫カゴの中身を説明されているうちに、メジャーな昆虫の名前ならいくつか覚えるようにまでになった。学生時代の自分なら一目見てぞっとするなり「そんなもの早く捨てて来て頂戴！」と怒りをあらわにしていただろう。子供から教わることはホントにたくさんあると真奈美は感心した。

天窗にはこの会社が独自に開発したインバータが設置しており、その日の空模様によって自動的に採光を調節する仕組みになっている。トップスクリーンと呼ばれる羽根が晴れた日には直射日光を遮り、曇りの日には全開となって少ない陽光をエントランス全体に取り込んでいく。もしこんなのが家にあつたら洗濯物がいつまでも乾かなくてきつと困るに違いない。真奈美は微笑んだ。

エントランスの東西にはクラブの入り口にも似た豪勢な左右開閉型のオートドアがそれぞれあり、その一方をくぐるとやはり吹き抜

けの本社受付ロビーに入る。真奈美はその受付にいた。訪問客としてではない。受付嬢としてだ。

やだ、この子、また一人で笑ってる。頭おかしいんじゃない、ほら、お客さん来たわよ、早くつたら…

風間幸子は声をかけた。

「桜井さん、そちら」

「あ、ハイ」

幸子は今年の春、結婚したばかりだ。やっと半年になり新婚生活も板についてきた。付き合い始めたのは前の会社で。夫、風間惣次郎は今もその会社で印刷機のオペレーターをしている。長身で痩せっぽち。髪を真ん中で分けて黒縁の眼鏡をかけている。どこと無く頼りなげだが、そこが幸子の一番好きなところだ。同期だった二人は入社して8回めの社員旅行で意気投合した。お互いそれまでほとんど口をきいたこともない間柄だったのに、運命とは思議なものである。それから五ヶ月後、幸子と惣次郎はハワイで結婚式を挙げた。身内だけの質素なものだったが、幸子は大満足だった。

印刷会社を辞めてすぐ派遣社員として大手電気メーカー本社で受付の職を得た。受付の仕事は前の会社で慣れてはいたものの企業規模があまりにも違い、社員数や訪問客の多さに当初はかなり苦労した。

幸子が受付になって一ヶ月ほど経った頃、同じ派遣会社の受付の相方が寿退社した。世話好きでテキパキと仕事をこなす素敵な人だった。幸子は姉のように彼女を慕い少しでも早く彼女をアシストできるような受付嬢になりたいと思っていた。

「私もう三十路だからラストチャンスなのよ、サッチャンものんびりしてちゃダメよ」素敵なお姉さんは恋バナを実らせて去って行った。替わりにやって来たのが桜井真奈美だった。

「コンパ？あ、コンペですかあー」

「いやパンフだよ、もう一部欲しいんだけど？日本語のやつ」

何やってんだか…

「ははは、ありがと、新卒？」

なわきやないでしょ！28よ、28のバツイチ、しかも子持ち！

幸子は真奈美のことが小憎らしく思えた。

仕事もろくに覚えなくせに若い男性社員には人気があったからだ。

どうして世の中のオトコ達は見た目ばかり気にするんだろう？それもちよっと、ううん、ほんの少し、モア リトルリトル…うんにゃ！どっちかというとかなり変な顔の部類だわ！大きな目。小さな鼻。尖ったあご。それに目と目の間が離れ過ぎなのよ…

「風間さん」

「あ、はいー」

庶務課の関だった。

来年定年になる関は薄い頭をピタピタと叩きながら、満面の笑みを幸子に向けていた。背は幸子より低くぺしゃんこな顔をしているので笑うと昔見た漫画の小泣き爺にそっくりだった。

いつもベージュの作業着を羽織っていて上着のポケット一杯にボールペンやサインペンがごっそり挿してある。

茶色く変色したビニールが首から吊したストラップの先にぶら下がっていて中には縁が擦り切れてボロボロになったIDカードが一枚厚紙と一緒に挟み込んであった。

「悪い、また電球が切れちゃってさあ」

受付の控室の奥は小さなストックルームになっていて予備の電球が保管してあった。

「いいんですよ」

幸子は営業スマイルを忘れず、すっと立って控室へ向かった。後ろから関がついて来る。

「サツちゃん、子供まだ作らないの？」

「うーん、考えてはいるんだけど」

カギを回して照明のスイッチを入れながら幸子は腰を屈めて靴を脱いだ。控室は和室になっているのだ。

後ろから関が幸子の下半身を注視しているのが幸子には手にとるようにはわかっていた。幸子は真奈美に比べてぽっちゃり体型だ。だから痩せぎすの真奈美よりカラダには自信があった。ふっくらと張り出した胸元。大きくて丸いお尻は手足がひよる長くてバツタみたいな真奈美にはない魅力であると。

それはある角度から見ると事実には違いなかったが、定年まじかの冴えない爺さんに観賞されるにはいささか抵抗があった。座敷に上がってサツと振り向くと関が慌てて視線を壁際の座卓にかわした。

「いつも小綺麗にしているねえ、感心感心」

ドスケベ爺め…

幸子は畳を敷いた部屋を横切って引き戸を開けた。立てかけてあった家庭用の脚立を起こして関を見る。

「えーとね、今日はアレだ、ハロゲンランプ」

関は膝に持病を抱えていて階段の登り降りもやっとだったから脚立に乗るのは幸子が真奈美の役目なのだ。関はここから電球を運ぶだけ取り付けは若い職員にやらせているらしい。楽と言えば楽な仕事だが関は他にメール便の仕分けや小荷物の整理等もこなしているから社員からは重宝がられていた。ただ、嫌われるといつまで待っても自分宛ての荷物が届かないことになるという意味で。

「いつもすまんねえ」

脚立に立って電球の箱を探すレディーに関は声をかけた。

「いいえ、どう致しまして」

「ああもつと左じゃないかなあ」

関が下から覗き込むように近づいた。

「え？こつち？」

幸子はわざとらしく姿勢を伸ばして片足をもう一段挙げた。ぽつてりとした太ももがあらわになったはずだ。

「ああそうそう、違うかなあ」

関は電球のことなんかそつちのけで幸子の下着のラインを凝視した。

「あ……」

幸子がふらついてみせる。

「おっと」

関が待つてましたと言わんばかりに両手を差し出して幸子のふくよかな尻を支えた。

「ごめんなさい」

「いやあ、いいんだよお」

「これかしら？」

幸子は脚立の上から八口ゲンランプを一つ掲げて見せた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4893i/>

---

受付嬢コンフィデンシャル

2010年10月31日01時07分発行